

今週の
一冊

暦と数の話 グールド教授の2000年問題 スティーヴン・J・グールド著
早川書房 本体価格一八〇〇円 渡辺政隆訳

人間の性癖が生み出した
2000年問題という狂騒

評者 北村行伸 慶應義塾大学客員助教授

著者のグールド教授はハーバ

ード大学で古生物学、進化論、科学史を研究する世界的な権威であるとともに、『ダーウィン以来』、『パンダの親指』、『ワンダフル・ライフ』など珠玉の科学エッセイを発表してきたホピュラー・サイエンスの旗手でもある。本書は、グールド教授が、まだ八歳の一九五〇年一月、『ライフ』誌に載った二〇世紀の折り返しを記念した特集号を目にし、二〇〇〇年には自分は五八歳になっており、一〇〇〇年に一度の瞬間に立ち会うことができると意識したときに、その構想が芽生えたといういわく付きのエッセイ集である。

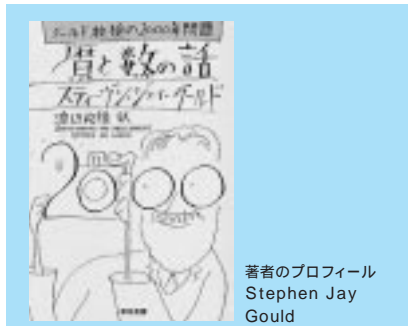
二〇〇〇年問題を、宗教と科学、暦と数、自然現象と人為的現象という切り口から、見事にさばく著者の基本的立場ははっきりしている。つまり、二〇〇〇年という区切りはきわめて恣意的なものであり、地球の誕生以来何十億年の歴史にとって

来年やってくる二〇〇〇年という年が、他の年ととりわけ違う根拠は見出せないし、ましてや黙示録に出てくるような最後の審判が一九九九年に訪れるなどという予言は、まったくばかげているということである。

ではなぜ、この二〇〇〇年問題あるいは暦の問題を取り上げるかというところ、そこに「人間が抱える癖のすべてが、そこに縮図として表れているからである。本性が頑ななせいでも、どんな論拠をでっち上げてでも陥ってしまう落とし穴と、少しでもむずかしい問題を理解したいという衝動を起させざる習癖と感情の前に立ちほだかる障害……」がこれほど濃密にすべてそろっている問題は、ほかにはちよっと見当たらない」からであると著者はいう。

二二世紀の始まり

例えば、ミレニアムは、黙示としてのミレニアムと暦として



著者のプロフィール
Stephen Jay Gould

ハーバード大学教授、ニューヨーク大学客員教授、アメリカ科学振興協会会長。1941年生まれ。専門は古生物学、進化理論、科学史。主な著書に『ダーウィン以来』、『ワンダフル・ライフ』など。

のミレニアム（千年紀）に分けられるが、前者が、現在の秩序が終わりを告げ、キリストが再臨する至福千年期が到来するという寓話であり、後者は、暦の上で千年単位の歴史が二回終了したことを意味する。この両者は歴史的に密接に関連しつつ、その主たる関心は前者から後者に移りつつある。キリスト教で広く受け入れられている解釈に、神がこの世を六日で創造し、七日目は休息したという聖書の記述を、聖書の一日は現在の二〇〇〇年に相当し、さらに世界は

紀元前四〇〇〇年に始まったとすれば、紀元二〇〇〇年で六〇〇〇年を終了し、それから最後の至福千年にあたる七〇〇〇年目に突入するというものがある。しかし、聖書の一日が一〇〇〇年である必然性もなければ、世界が紀元前四〇〇〇年に始まったという言説に及んではまったくの嘘であることが今となってはわかっていく。

また、二二世紀はいつから始まるのかという問題も、制度上は二〇〇一年一月一日とされているが、これは、六世紀の修道士ディオニシウスがキリストの誕生八日目の割礼祭を紀元一年一月一日としたことに端を発している。当時のローマ人の知識にはゼロという概念がなく、数字は一から始まるものであったのだから、この決断はいしたしかたが

この本の目次

緒言 まったく恣意的なミレニアム

第一部 ミレニアムとは何か
ミレニアムの再定義 聖域での決着から俗世間での秒読みへ

第二部 いつなのか
デニスの大論争とたんば大逆転 (D × 4 = 2000)

第三部 なぜなのか
パート1 つむじ曲がりの自然
パート2 五週間

ないが、それ以上の理論的根拠は何もない。著者は一般市民の感覚として一九九九年から二〇〇〇年に変わるほうが決定的移行に見えるだろうとして、二二

世紀が二〇〇〇年に始まるのか二〇〇一年に始まるのかは、そもそも決着のつかない問題なのだから、それを論争したり、統制をとろうとしてもムダだとしている。

おそらく今年から来年にかけて、千年紀期末および二〇世紀末に関する書物がたくさん出てくるだろう。なかには過度の悲観論や、恐怖心をあおるものもあるだろう。本書のメッセージは、二〇〇〇年を迎えるに当たって、この歴史的瞬間に立ち会えるという特権を健康に享受しつつ、悲観、楽観あらゆる見方に理屈をこじつけようとするかたくなで、好奇心が強く、それでいて滑稽な人間という愛すべき存在を観察するいい機会としてよつとということである。

暦の歴史についてさらに関心をお持ちの方は、『デイウィット・E・ダンカンの好著『暦をつくらした人々』(河出書房新社)をお勧めする。